7月14日（金）。一学期末考査明けの特別授業の最終日、今年度の音楽祭が開催されました。

長年続く本校ならではの学校行事であると同時に、今年度は色々な意味で「新しい」音楽祭を迎えるにあたり、私は次のような挨拶をしました。

みなさん、おはようございます。いよいよ今年の音楽祭が始まります。

この音楽祭ですが、今年転勤してこられた本校の卒業生小林先生の在学中に始まりました。また、会場をそれ迄の体育館からこのアルネ津山に変えた時に津商生だったのが、これも今年本校に来られた坂田先生です。

小林先生の高校時代というと、失礼ながら四十年近く前のことです。そんなに昔から現在まで、津山商業ならではの学校行事として存在し続けているのが音楽祭です。また会場だけでなく開催時期や発表内容・形式などは、折々の校内や社会状況によって様々に変化しながらも、絶えることなく今日に至っています。そんな音楽祭の流れを、「社会との繋がりを大切にし、社会の変化に敏感に対応する」商業高校のイベントとして相応しいと感じます。

さて今年の音楽祭ですが、これまでの変化に勝るとも劣らない大きな2つの変化があります。

1つ目は、各クラスの発表に加えて学年での合唱が加わったことです。全学年4クラスとなってできた時間的なゆとりが、学年単位の発表の機会に回ることとなります。担当の先生方が考え抜いて選んでくださった候補曲の中から、各学年がどの曲を選んでどんな思いを込めてどんな合唱に仕上げてくれたのか、おそらくこれからの音楽祭の目玉になるであろう第1回の学年合唱を、大いに楽しみにしています。

2つ目は、「つしょうレインボー・プロジェクト」の、一学期の総まとめのイベントとして位置づけられた学校行事だということです。2年目となるレインボー・プロジェクトは、4月当初から、全校生徒あるいは学年やクラス毎に様々な活動を行ってきました。音楽祭は、7つの力の中の特にアイディア力とチームワーク力を育てて、2学期始めの自彊祭そして11月の津商モールの成功に繋げることを目標にしています。7分間という限られた時間の中で、12のクラスがそれぞれどんなアイディアを見せてくれるのか、4月にスタートした今年のホームルームが一学期間でどれだけチームとして動けるように成長したのかを、「音楽の祭」という名にふさわしい音楽性・芸術性とともに、審査員の一人として、重点的に審査したいと思います。

最後に、例年この素晴らしい会場で音楽祭を開催させてくださっているアルネ津山様に、皆さんと共に感謝するとともに、この日を迎えるまでに色々と準備をしてくださった生徒会や文化委員のみなさんや先生方に、心からお礼を言いたいと思います。

皆さんが卒業し、成人し、親となり、皆さんの子供が津商生になった時に「今の音楽祭のスタイルは、私達が作った」と胸を張って言えるものになることを期待して、開会の挨拶といたします。

「大いに楽しみ」と述べていますが、内心は「大丈夫かしら、今年の音楽祭…」と思っていました。というのも「学年合唱」という新たな取組が加わったにも関わらず、今年の音楽祭の準備・練習にかけられる時間は、昨年と大差ありません。それどころか特別時間割で設定している学習メニューは、各教科の通常の授業だけでなく演劇ワークショップ・社会貢献活動（３年）、小論文講演会と執筆・進路ガイダンス（２年）、インターンシップ準備（１年）など、学年毎に多彩です。加えて、二学期の主要行事である自彊祭や津商モールのためのＬＨＲも組み込まれていて、生徒達は「音楽祭に集中的に取り組もう!!」という訳にはいきません。直接担当の生徒会係の先生を始め、多くの先生方のバックアップはあるものの、限られた時間の中でこれだけ多彩な内容に取り組めて成果が上げられるのか？と、感じてしまったのです。

しかし、それは杞憂に終わりました。１２クラスの発表は、定められたルールの中で各々の持ち味を生かしたアイディア力とチームワーク力溢れるものばかりでした。何より感動したのは学年合唱です。学年全生徒の豊かな声量と美しいハーモニーが館内に響き渡り、「今後の音楽祭の目玉になること間違いなし！」です。

一学期の終業式は、７月 19 日（水）でした。

一学期の始業式で私は、「『生きているだけで丸もうけ』を実践して長生きしよう。そのために自分の意志で、自分を成長させよう。今年度の津商にはレインボー・プロジェクトを始め、そのためのチャンスがいろいろあるし、先生達は皆さんをしっかりバックアップするから」と言いました。

その言葉を覚えていてくれていたかどうかは分かりませんが、昨年度までと大きくバージョンアップした先週の音楽祭を始めとする様々な学校行事、先ほどの表彰伝達や壮行式がその一例の部活動、そして何より日々の授業をとおして、皆さんの成長ぶりを見せてもらうことができた一学期間でした。

もちろん、個々には辛いことや悲しいこと、あるいは改善が必要なことが起こった人もいますが、そうしたマイナス面をも、自分を成長させる機会としてくれていると信じたいです。ここでは、夏休みを迎えるにあたって、もう一つお願いの追加をしたいと思います。

朝日新聞の一面の左下に「折々のことば」という欄があります。古典の名著の一節から現代のツイッターのつぶやきまで、様々な内容・形式・作者の短い言葉の紹介と、その言葉についてのコメントが述べられています。この欄にだいたい目を通している私が、今年度になって、つまり今年の４月１日以降で一番気に入っていのが、４月27日に載っていた「長沢節（なが

さわせつ）」という人の次の言葉です。

「世界の中から特定の個人を選んで食べる愛を『恋愛』というならば、世界そのものと直接に関わる愛を『仕事』と呼んでいる」

長沢さんは、1917年に生まれて1999年に亡くなった日本のファッション・イラストレーターの草分け的な存在ですが、私がこの言葉に惹かれたのは、長沢さん自身の人生とは関係なく、この言葉そのものが私の実感とバッチリ重なるからです。

前半部分もなかなか深イイ言葉ですが、私の実感と重なるのは、後半の「世界そのものと直接関わる愛を『仕事』と呼んでいる」の部分です。

教員という仕事に就けたおかげで、生徒や同僚の先生達、保護者の方々や学校を取り巻く様々な社会の人達といったステキな人達と関わることができ、私みたいな欠点や弱点だらけの人間でも、自分の持ち味を生かしてこの世界に生きている意義を感じられています。私にとって教員という仕事こそ、世界と自分との間の愛そのものだと、自信を持って言えます。

「仕事が愛」なんて、思っていても言葉にするのは恥ずかしい気もするのですが、私はいわば3年生の皆さんと同級生で、今年度で津山商業を、そして高校の教員という仕事を卒業する予定の身なので、思い切って言葉にしました。

そんな私の皆さんへの願いは、津山商業での日々の中で、皆さんにも「これが自分の、世界そのものと直接関わる愛だ」と言える将来の仕事と、その仕事に就くための道筋を見出してほしいということです。また特に3年生の皆さんはそうあってほしいのですが、既に見出している仕事に就くための道筋を、どんどん進んでほしいということです。私以下本校の先生達は、あらゆる場面でそのための支援や助言を惜しみませんが、「世界への愛」と呼べる仕事を見出して実現させるには、他に必要なことがあります。それは「心の余白」。つまり心のゆとりとそれを生み出すための時間的なゆとりです。明日から始まる「夏休み」という時間的なゆとりは、心のゆとり、「心の余白」につながります。

「夏休みだって暇じゃない」という人もいるかもしれません。しかし少なくとも、学校で決められた毎日の時間割からは解放され、自分でスケジュール管理ができるという「心のゆとり」は生まれるはずです。ぜひ、誰かに決められた毎日から離れて、心に余白を作って、「愛」を感じられる自分らしい世界との関わり方を見つけてほしいです。

始業式の「『生きているだけで丸もうけ』を実践して長生きしよう」というお願いに、「愛を感じられる『仕事』に就くために、夏休みという『心の余白』を活用しよう」というお願いを追加したいと思います。

先日の音楽祭の感想や、一学期にみんなが頑張った様々なことについても、もっと話したいのですが、同じ理由でここでは辞めておきます。

8月28日の始業式には、全員が、今以上に心も体も元気で、生き生きと、二学期を迎えていることを願って、式辞とします。

「心身共に健康で！」「『夏休み』という『非日常』の有効活用を！」

一昨年と昨年そして今年と、一学期終業式の式辞で生徒達に語った内容はほぼ同じです。違いは材料を何にするか…そこが、いつも悩ましいところなのですが…今回は「教員生活の締め括り」という私の思いも交えながら、鷲田清一氏が編まれている「折々のことば」から引用させてもらいました。

７月には、その他にも色々な取組や行事がありました。具体的には、津商ブログを御参照いただければと思います。

今日は例年どおり体育際に向けて始まった太鼓練習の音が鳴り響く中、保護者懇談会が行われています。８月に入ると、３日にオープンスクール、１～４日が四校連携講座などが待っています。生徒と一緒に、暑さに負けずに頑張りたい!!と思っています。

平成２９年７月26日